

平成 28 年 6 月 28 日掲載

### 志野前大使コーナー



こんにちは。在アイスランド大使の志野光子です。

アイスランドは、北緯 64 度 8 分に首都レイキャビクを置く北の国。そして国名からも、寒く凍り付いた国をイメージしてしまいます。しかし、実際には、それほど寒くなかったり、春から夏にかけては緑(といっても草原とコケの緑)に覆われたり、大統領府にも首相府にも警備が居ないほど治安が良かったり、世界で初めて女性大統領(国家元首)を選出したり・・・不思議な魅力にあふれた、人も自然も美しい国です。

このページでは、私の経験を通じて、アイスランドの不思議な魅力をお伝えすることにより、最北の国を身近に感じていただき、かつ、日本とアイスランドの新しい協力の可能性のヒントなりとも見つけていただけたらと思っております。あくまで私個人の視点ですので、みなさまからのコメントもいただきつつ、充実させていきたいと考えております。

## 目次

- 志野前大使コーナー
- 1. はじめまして
- 2. 居心地の良い距離感
- 3. 東北のミライとアイスランド
- 4. 伝えるということ
- 5. 自分の言語を大切にす国
- 6. 色の無い世界
- 7. あけましておめでとうございます
- 8. 「氷の国」アイスランド
- 9. 世界一男女平等な国の国際協力
- 10. やはりアイスな アイスランド
- 11. レイキャビクからの祈り
- 12. アイスランドの夏が始まる日
- 13. 大国だろうと小国だろうと
- 14. 大陸をまたがる家族の再会

## 1. はじめまして



はじめまして、こんにちは。

8月7日、アイスランドに着任した志野光子です。アイスランドは、私が大使という任務を拝命して初めて赴任する国ですが、同時に、アイスランドに日本の大使が常駐するのも私が初めてです。

東京には、すでに2001年からアイスランド大使が常駐していらっしゃいますので、私の着任で、ようやく双方の外交のプラットフォームが整ったということになりますでしょうか。アイスランドのみなさま、よろしくお願いします。

さて、そこでこの写真です。アイスランド国旗とともに日本国旗が掲揚ポールにはためいているこの建物。日本国大使館ではありません。アイスランド外務省なのです。8月8日、到着の翌日、アイスランド外務省に表敬挨拶に伺った時のことでした。外務省の受付窓口にも、小さな両国旗が飾ってありました。東京都心に在住の方は、このように外国の国旗が並んでいるのをご覧になったことがあるかもしれません。でも、それは国賓などの形で外国の賓客をお迎えするときであって、新任大使の到着では提供してくれません。到着早々、両国国旗の掲揚というジェスチャーで、心からの歓迎の意を表してくれたアイスランドに、早速好印象をいただいた次第です。

「アイスランド」という国名から、みなさんは何を連想されますか？ 治安の良さ、オーロラ、女性大統領、米ソ首脳会談… これから少しずつ、私が経験するアイスランドをお伝えすることができたらと思います。

どうぞよろしくお願いします。

## 2. 居心地の良い距離感



9月8日、大使館にて着任御挨拶のレセプションを開きました。

長年の日本の友人たち、アイスランドの政治・経済・学術界での主要な方、当地の外交団の方々をお招きしました。月曜日の雨模様でもあるにもかかわらず、多くの方にご出席頂きました。ありがとうございます。

こういった儀式があつて初めて、日本大使として閣僚に会ったり、公式の席でスピーチをすることが認められます。私については、早速翌日の10月25日にそういう機会が待っていました。言い換えれば、大統領が信任状の早い提出を認めてくれたために、重要な機会に間に合ったと言えます。

そのレセプションで感じたのは、旧き良き、日本の「おつきあい」にも類する気持ち。お祝い事があると、何はともあれ、駆けつけて、ともに祝福してくれる気持ちです。人と人の距離感が、日本人に近いものを感じます。初対面の人に気軽に声をかけることはなかなかできませんが、適度な距離をおきつつも気にかけて、いざ何かあったら駆けつけられるような距離を保っている、そんな感じです。

今回のレセプションには、写真でご覧の通りスヴェインソン外務大臣にもご出席いただきました。特段の懸案事項はなくても、このような機会を利用して、両国の近況を伝え合い、何かお手伝い(協力)できることはないかを話し合えます。普段のおつきあいから相互理解と信頼が生まれるのは、地域社会と同じです。

外相にもお寿司を食べていただきつつ、アベノミクスと女性が輝く社会に向けた日本の取り組みをお話しさせていただきました。ジェンダーギャップが一番小さい国アイスランドでも、まだまだ取り組む課題はあるが、日本の取り組みを評価し歓迎しますと言っていました。

このほか、多くの親日家・知日家の方にお越しいただきました。また、機会を見つけてご紹介させていただきたいと思います。ありがとうございました。

### 3. 東北のミライとアイスランド



9月25日、アイスフィッシュ(ICEFISH)を見学してきました。オープニングにはグリムソン大統領、ヨーハンソン環境・漁業・農業担当大臣等の要人も参加するアイスランド最大の経済見本市です。欧州を中心とした各国から、造船、水産物加工等、漁業・水産業に関する最新技術が展示されていました。気仙沼からも、木戸浦造船の木戸浦健敏社長、石川電装の石川貴之取締役、小野寺鐵工所の小野寺卯征社長他、数名の方が参加されました。

気仙沼とアイスランドの御縁は、東日本大震災から数ヶ月後、エギルさんとヨーコさんという、アイスランド人と日本人のご夫婦がボランティアとして入られたのがきっかけだそうです。ご存じの通り、アイスランドも漁業の国。数度にわたり、コンタクトをとるうちに、アイスランドで設計した船を、震災後の復興プロジェクトとして気仙沼の造船所等で立ち上げる造船団地で建造できないかという話に発展したそうです。これは「ミライ・シップヤード」と名付けられた、東北未来創造イニシアティブの一つとなるものです。

ところで。気仙沼にボランティアに入られたアイスランドの方から、東北人とアイスランド人は気性が似ているとのコメント。「アイスランド人と東北の人は、寡黙だけれども、言うことははっきり言うので付き合いやすい」のだそうです。確かに、アイスランドでは、押しつけがましくは無いけれども、いつも見守られているような居心地の良さを感じます。

東北の未来創造、2016年の進水式、アイスランドから応援します。

## 4. 伝えるということ



10月4/5/6日の3日間、樋口一氏が「ポストマンライブ」を当地で開催してくださいました。2009年に開始して以来173/174/175回目、かつ国外初のライブだそうです。こんなに遠くまで来てくださり、ありがとうございました。また、樋口氏のライブをアイスランドに呼ぼうと思い立った美也子さん、素敵なイニシャティブをありがとうございます。樋口氏は、このライブを「手紙～親愛なる子供たちへ～」という曲に込められたメッセージを伝えるための活動と位置づけていらっしゃいます。

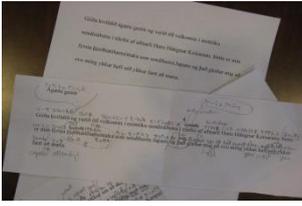
アイスランドでは、名字は親のファーストネームから派生させてつくります（例えば、ペーターの息子はペーターソン、娘はペータードットシル）。年齢を重ね、身体の限界を感じつつ、自分が子供たちを慈しんだ大切な時を懐かしく思い出す。人生が始まり、人生が終わるときに、親子の強いつながりを笑顔で確認する。

メッセージを伝えるためには、発信する者と受け取る者に、共通の理解がないと上手く共鳴しません。名前の中に親子の絆が組み込まれたアイスランドの人たちには、このメッセージがしっかり伝わったと思います。樋口氏が、最初に海外に届けた手紙の宛先がアイスランドというのは、日本人とアイスランド人が、ともに大切に感じているものの共通性を象徴するように思われました。

私個人は、「のぞみ」という歌に一番心を打たれました。仕事をしながら出産をするには、かなりの覚悟が必要でした。生まれてくる子供によっては、現在の仕事を継続することも困難になるでしょう。それでも、自分は、この子供を大切に育てる覚悟があるのか。思い詰めるように悩んだことを思い出します。「のぞみ」の歌には、自分の子供をあるがままに受け入れ、大切にする親の気持ちが歌われています。そこに至るまでの、葛藤と、葛藤していることをふがいなく思う気持ち。そういう複雑な感情を乗り越え、子供をゆっくり育てる喜びに転換していく過程に、心を強く動かされました。

そして、この「手紙」をお伝えするための伴奏は、当館の内田参事官によるギター。大使館は、二国間の理解を深めるために努力していますが、こういう形で日本の価値・文化をお伝えするお手伝いできたことを、とても誇りに感じます。

## 5. 自分の言語を大切にする国



見たこともないアルファベットが混じるこの文章、今年の国祭日レセプションでの私の挨拶文です。最初と最後だけ、アイスランド語で話してみました。しかし、難しい・・・文法も難しいのですが、単純に発音するだけでもとても難しい言語です。ð とか、ð とか、þ とか・・・なかなか口がまわりません。

アイスランド語は北欧諸国の言語の仲間です。ノルウェー語に近いとされていますが、他の北欧言語が時代とともに簡素化されていったのに対し、アイスランド語は昔のまま残っているようです。中国では王朝が変わるごとに漢字の読み方も影響を受けたのに対し、日本では複数の音読みが残ってしまったのに似ているように感じます。両者とも、大陸の端っこの島国という特性を共有しているからでしょうか。ノルウェー人は、アイスランド語を聞くと、中世の言語を耳にするように感じるらしいです。

人口約 32 万人の国で、近くに類する言語があるにもかかわらず、変化の影響を受けずに残った言語だけあって、アイスランド人の言語に対する愛着は深いものがあります。単純にコミュニケーションの道具としてだけではなく、文化や慣習の伝承ツールとして認識されています。安易に外国語を外来語として受容するのではなく、自国語に変化させて取り入れています。例えばコンピューターを意味する tölva は、tala(数)と volva(予言者)を組み合わせた造語で、また、警察を意味する lögregla は、lög(法)と regla(規律)を組み合わせた造語です。また、電話を意味する sími はバイキング時代に糸を意味した古語の sími を転用しているのだそうです。新しく外国語の概念が入ってきたときに、どうやって決めているのか、興味がわきます。

アイスランド語を大切にすると同様、世界に存在する少数言語も大切にする国民です。日本語も大好きです。大学における外国語習得登録者数では、日本語は英語について 2 番目に登録者数が多いのだそうです。欧州言語では無い言語を学びたいという好奇心とともに、言語を通じて、背景にある日本の文化や社会を知りたいという意欲が感じられます。あるモノ／感情を指し示す単語が存在しなければ、その言語にはその単語に呼応する概念が無い可能性が高いと思います。新しく外国語を学び、新しい単語の存在を知ることにより、新しい概念や感情を認識できるようになります。アイスランド人にとって、遠い国の言葉である日本語は、認識する世界をより大きく広げる言語なのでしょう。

さて、国祭日のアイスランド語での御挨拶。お世辞もずいぶんあると思いますが、みなさん、好意的に受けとめてくださっていました。ちょっと発音が変わっても、少し意味がわからなくても、外国の人がその国の言語を話そうと努力している姿を好意的に受けとめる点も、私たち日本人と共通しています。

## 6. 色の無い世界



12月22日、冬至。一年で一番夜が長い日です。北緯64度08分に位置する、世界で一番北にある首都レイキャビクでは、本当に長い夜を迎えます。

アイスランド気象庁(Iceland Met Office)によると、12月22日のレイキャビク市の日の出は11時23分、日の入りは15時30分。太陽の昇っている時間はたったの4時間7分です。

朝、大使館に出勤してもしばらくは真っ暗。朝から残業をしているような気分になります。11時近くになるとようやく明るくなりますが、陽射しは弱々しく、午後4時にはもう夕闇。そして明るい間に見える景色は、一面の雪景色。風を遮る木も高いビルも無いため、いったん地面に降りた雪も風で舞い上がり、上から下から横からの雪吹雪となることもあります。

黒と白の、色の無い世界。白黒映画の中に紛れ込んだような気分になります。

## 7. あけましておめでとうございます



アイスランドの新年は、大晦日からの花火が打ち上げ続けられる中、訪れます。これまで他の欧州の都市でも花火の大晦日を経験しましたが、レイキャビクは、また格別。高層ビルが無いので視界をさえぎるものが無く、街のシンボルでもあるハットルグリムス教会を彩る大輪の花が、とても良く見えます。

そして、この国の花火は、とても市民参加型。クリスマスが終わった12月27日ごろから、街のあちこちに花火売りのスタンドがたちはじめ、小さな子供から大人までひっきりなしに訪れ、自分にあったサイズの花火を購入していきます。驚くことに、打ち上げロケット花火やら、箱形になっていて連打できる花火やら、これまで自分で打ち上げることを考えたことも無いような本格的な花火が売られています。この花火販売は海上救援隊が運営しており、売り上げは海難事故にあった船や船員を救助するボランティアの人に渡されるとあって、購入する人たちも「良い目的にお金を使っている」という気持ちからか、高額の花火をたくさん買っていきます。

結果、レイキャビクの大晦日は、夕方暗くなると(16時にはすっかり暗くなっていますが)、待ちきれない人たちが打ち上げる花火の音が聞こえ始め、23時過ぎると、あちらでもこちらでも大輪の花が咲き続ける、本当に見事な夜景となります。

スタンドではかなり大きな打ち上げ式花火を勧められた我が家ですが、初心者としてやや小さめのものを購入しました。それでもピューという鋭い音とともに空高く飛んでいき、綺麗に二連の花を開かせる様子には、言葉も無いくらい感動しました。

日本では花火は夏の風物詩、冬の花火は間が抜けているとも言われるけれども、凍るような空気の中に咲く花も、なかなか見応えがあります。アイスランド人に言わせれば、アイスランドの夏は白夜ゆえ、夏に花火を上げても見えないのだそうです。なるほど、ところ変わればなんとやらと納得しました。

2015年のみなさまの健康とご活躍を、アイスランドより祈念します。

## 8. 「氷の国」アイスランド



アイスランドにやってきたのは8月。日本の暑さを後にしてきた身には、すがすがしい涼しさでした。

そして、冬のアイスランド。さぞや、凍り付くような寒さが・・・と思いきや、近海にながれる暖流のおかげでそれほど温度は低くなりません。1月・2月の月平均気温はゼロ度前後。北海道よりも、ずっとマイルドです。

では、意外と暖かいのかと言われれば・・・やはり、寒いです。何よりも、吹き荒れる風の冷たさ。そして、日照時間が短いため、陽射しの暖かさを皮膚でも視覚的にも感じるできません。白黒の世界に追い込まれたような、冷たく寒々した毎日です。

そこで、心機一転。いっそ、氷の世界に飛び込もうではありませんか！と、訪れたのが、氷の洞窟。アイス・ケイブとか、クリスタル・ケイブとか呼ばれており、ヴァトナ・ヨークルという欧州最大の氷河の中に存在しています。

雪が白いのは、水分に空気を含んだまま凍っているから。氷河は、水が凍ると言うよりも、雪が堆積していくため白いのですが、長年の重みでドンドン空気が抜けてゆき、氷河の下の方の氷は空気の抜けた青色になっているのだそうです。そして、氷河の下を静かに流れる地下水脈に、氷のかけらが割れて落ちてできた空間が、この洞窟。だから、氷は青いし、断面は鋭角では無くなだらかなカーブを描いているのです。

洞窟内では、自然を破壊しないように、そして地下水脈に足を取られないように、ガイドの指示に従って歩きます。また自然の青色を写すために、フラッシュは使用せずに撮影をします。この写真は、私の14歳の息子が自分のカメラで撮影したものです。プロのカメラマンでも無い、プロ仕様のカメラでも無いのに、こんなに幻想的な写真ができあがりました。しかし、身体全体が、この氷河の洞窟の中に囲まれた者としては、現実はもっと素晴らしかったとしか伝えようがありません。

ただ、このような氷河の洞窟があるということは、表面積ですら縮小傾向にある氷河が、体積としても小さくなっている(溶けている)ことの実証ともいえます。幻想的な眺めに心を動かされると同時に、これが本当に幻想になってしまう日が来るのでは無いかともおそれるのです。

## 9. 世界一男女平等な国の国際協力



アイスランドは、世界経済フォーラムが発表する報告書において、ジェンダーギャップが6年連続で世界一小さな国とされています。2月には、アイスランドの社会民主同盟本部に行き、日本の女性の社会進出政策についてレポートしてきましたが、その会合の参加者の過半数は男性。男性も女性も、それぞれの性が最大限に輝ける社会をつくるために知恵を寄せ合う姿勢を感じました。

そして今日の写真は、アイスランド大学校内で開催されている、国連大学のジェンダー・イコリティー・スタディーの研修コース参加者との記念の一枚です。参加者は、マラウィ、ウガンダ、モザンビーク、パレスチナ、アフガニスタンから選ばれてきた、男性5名女性5名。アイスランドで、約半年の研修を行います。

アイスランドは、このジェンダー平等以外にも、地熱、水産業、土地保全をテーマとした国連大学の研修を実施しています。水産業のように移転する技術を思い浮かべることができる研修は研修内容も想像できるのですが、「ジェンダーをテーマとした研修」って何をどうやって学ぶのだろうと強い好奇心に駆られ、半日参加させてもらいました。

この日の研修のテーマは、「ギャップ」。それは、男性と女性の間にあるだけではない、世代間、地域間、異なる宗教や社会の間に存在するということを明確に認識し、その上で、他のギャップをどのように克服するのかを例としながら、ジェンダーギャップの克服方法を考察するという授業でした。

この研修では、このように抽象的な概念を、経験に基づいて議論してゆき、最終的には、自分の職業・立場を踏まえた具体的なプロジェクトを立案し、帰国後、それを実施することが求められています。また、参加者は、公務員のみならず、NGOメンバー、教師、研究者等々、さまざまな立場の人が混在しているそうです。意見交換をするだけでも、地域や立場のギャップを超えた議論が行われていました。

単に抽象論にとどまるのではなく、それぞれの国の状況にふさわしい男女共同実現のための具体策を提示することが求められ、またそれは実現可能なもので無くてはならないということです。なかなか野心的なプログラム・・・5月中旬のプロジェクト発表には、再度、聴講に来たいと思っています。

## 10. やはりアイスな アイスランド



アイスランドはメキシコ湾流の影響で、北緯 65 度としては寒くないと言われますが・・・4 月に入っても霰(あられ)がふるようでは、やはり寒いとしか言いようがないです。アイスランド人によると、何十年ぶりの寒い冬だそうですが、私にとっては初めてのアイスランドの冬。経験値一の私としては、「寒い！」と主張したくなってしまいます。

これは 4 月 7 日、イースター休暇明けのレイキャビクに降った霰です。5 ミリから 7 ミリほどの氷の粒が、いきなりパラパラと降って来ました。つぼみをふくらませていたクロッカスがとても痛々しくかわいそうに。しかしよく見ると、この霰、大きさといい形といい、粒状のアイスクリームのようにも見えてきます。レイキャビクは、世界一空気の綺麗な首都とも言われているので、案外、美味しくいただけるかもしれません。

とはいえ、春がとても待ち遠しく感じられます。

## 11. レイキャビクからの祈り



レイキャビクという地名から、レーガン・ゴルバチョフ会談を想起される方もいらっしゃるのではないのでしょうか。1986年10月11日、両首脳はレイキャビク市内で会い、中距離核兵器の削減に合意します。「冷戦の終わりの始まり」ともなった歴史的会談です。

そのレイキャビク市で毎年8月6日あるいは9日、核兵器の無い世界を祈って、ろうそくに火が灯されます。1985年から続く市民有志による行事、つまり、今年で30年目、第31回を迎えるイベントです。陽が暮れる頃(といっても北緯65度に近いレイキャビクですので、22時半ぐらいからです)、散歩をするかのように多くの人がチェルトニン湖畔に集まり、おばあさんたちが手作りしたろうそくを買い求め、火を灯し、湖に浮かべます。スピーチも主催者の方とスコットランドから来られた仲間の方が、二度とヒロシマ・ナガサキを繰り返さないように、みなで祈りましょうといった簡単なものだけ。

周りを見ると、レイキャビク市長や国会議員もいらっしゃるのですが、この日はみな一市民として核の無い世界に祈りを捧げます。

私たちの「ノーモア ヒロシマ、ノーモア ナガサキ」のメッセージがアイスランド市民に正しく受けとめられ、1986年の歴史的合意に力を与えてくれたような、そんな気持ちになりました。

## 12. アイスランドの夏が始まる日

みなさん、ご無沙汰しています。

アイスランドに知人が増えたり、興味深い場所を教えてもらったりすると、本当に、あっという間に時間が経ってしまいます。

4月21日は「夏の始まりの日」として、アイスランドは祭日でした。確かに当日は、暖かい陽射しが降り注ぐ日となったのですが、その前日まで、チラホラ小雪がふるような天気。日本人が「夏」をイメージすると、大間違い、「これが夏かあ(ちょっとため息)」という感じです。

でも、アイスランドがこの日を「夏の始まりの日」として祝うには、それなりの理由があるようです。

アイスランドの年間気温を見ると、冬でも平均最低気温はマイナス3度程度。欧州大陸内部の、マイナス30度などという寒さに比べれば、たいしたことがないかもしれません。しかし、昔々のアイスランドは、樹木の生育に適さない溶岩台地。木材は輸入しないといけないので、普通の人の家はターフ(=turf: 芝地を根も土もついたまま切り出したもの)を石の土台の上に重ねて作った壁に囲まれていたようです。海風を遮る木もなく、ターフの家は湿気が多く、体感気温は数倍にも厳しく感じられたことでしょう。昔のアイスランド人にとって、冬を越すことは、本当に大変だったことなのです。

ゆえに、昔のアイスランド人は、(ものの本によると)誕生日で年を重ねるのではなく、いくつ冬を越したかで年齢を数えたのだそうです。

そういうアイスランド人にとって、「夏の始まりの日」は、「冬が終わった日」であり、生き抜いたことを喜ぶ日であったようです。

追記: 日本とアイスランドの外交関係も、年月を重ね、今年で60周年を記念しています。本コーナーをお読みの方で、60年間の日アイスランド関係に関する逸話(特に初期の頃)をご存じの方、記念するお写真・資料等をお持ちの方、大使館まで[メール](#)をいただくと幸いです。

### 13. 大国だろうと小国だろうと



こんにちは。在アイスランド大使の志野光子です。

アイスランドは、北緯 64 度 8 分に首都レイキャビクを置く北の国。そして国名からも、寒く凍り付いた国をイメージしてしまいます。しかし、実際には、それほど寒くなかったり、春から夏にかけては緑(といっても草原とコケの緑)に覆われたり、大統領府にも首相府にも警備が居ないほど治安が良かったり、世界で初めて女性大統領(国家元首)を選出したり・・・不思議な魅力にあふれた、人も自然も美しい国です。

このページでは、私の経験を通じて、アイスランドの不思議な魅力をお伝えすることにより、最北の国を身近に感じていただき、かつ、日本とアイスランドの新しい協力の可能性のヒントなりとも見つけていただけたらと思っております。あくまで私個人の視点ですので、みなさまからのコメントもいただきつつ、充実させていきたいと考えております。

## 14. 大陸をまたがる家族の再会



アイスランドは、ユーラシア大陸と北米大陸が発生する地として有名ですが、今日は、ユーラシア大陸の端にある日本の家族と北米大陸の家族が、ここアイスランドで再会したお話を紹介させていただきます。

13年前のこと。ある日本人高校生がアメリカに留学していた時、スキー旅行でひどい事故に遭ってしまいました。彼は頭に大けがをし、記憶を完全に失い、また覚えることも困難となってしまいました。彼の家族は遠く離れたところにおり、彼は外国にひとりぼっちでした。しかし、彼の学校の友人と、その家族が、日本の少年を毎日病院にお見舞いしてくれたのです。毎日、毎日、2-3ヶ月の間！毎日病院を訪問すると、その父親は、少年に同じ質問をしました。「あそこに橋が見えるかい？なんて名前か、知ってるかい？ゼーカム橋っていうんだよ。」ある日、その父親は少年の表情に、何かを思い出そうとしている様子を感じ取りました。記憶力を取り戻すきっかけです。「うーん、知っているような気がするんだけども...でもわからない。」「あれは、ゼーカム橋っていうんだよ。」毎日、毎日、2-3ヶ月の間です。そして、とうとう、その少年は、記憶力を取り戻します。

その日本人の少年は、今は3歳の息子の父親となり、ここアイスランドで、アメリカ人の父親と再会します。3歳の息子のアメリカ名はゼーカム、アメリカの父親の名前はロバート・C・バーバー、在アイスランド米国大使です。